

# Special Report

## インタビュー ①

(掲載企業は50音順)



向かって左から、アイシン精機(株) TQM・PM推進室 花村和男室長、伊藤要蔵室長、澤田昌志チームリーダー

# 日常業務の中でSQC手法を使いこなす トヨタグループの中核企業

JUSE-StatWorks®/V4.0総合編のネットワーク版をフルに活用し、豊富な成果を出す

## アイシン精機株式会社

トヨタグループのTQM活動は「お客様重視」「継続的改善」「全員参加」を基本として、人と組織の活力を高める活動として定義され、地道に実施して培われた企業文化がトヨタグループの強みの源泉となっている。

アイシン精機(株)でも1967年にTQMを導入し、1972年にデミング賞を受賞した。

現在は、アイシングループ各社にも普及して、グループ全体の企業体質の改善に貢献している。

TQMの基軸を高める活動として、技術開発・生産技術・品質保証・事務管理・工場などのスタッフ部門のSQC活動に力を入れている。

### 1. 徹底したSQC活用教育

部門の重要課題にSQC手法を使って解決させるため、全従業員にSQC教育を徹底している。解析ソフトの活用や事例研修などSQCの実践を重視した教育である。

「SQC活用推進における人材育成」は、「QC教育システム」と「SQC活用推進システム」をリンクさせて、知識習得の教育に終わらせずに実業務で成果をあげられるように相乗効果を狙って実施されている。

### 2. SQC活動の活用推進体制

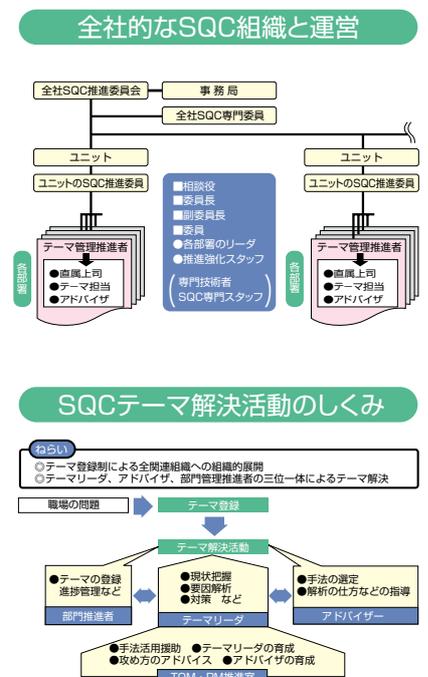
「全社SQC推進委員会」の下に位置付けられる部門毎の「ユニット

SQC推進委員会」(担当役員が相談役)が活動の中心となる。

ユニット毎に、テーマの登録から解決までテーマリーダー、アドバイザー、部門推進者が一体となって活動している。

2000年度から

は、事務部門(営業・経理・人事など)まで拡大されてSQC手法の活用が進んできた。





### 3. SQC手法の活用推進にあたって、事務局 (TQM・PM推進室) が苦心したこと

#### 1) 出前の実践教育を推進

解決が難しいテーマについては、推進事務局が自ら現場に出向いて「SQCで解いてみせる」という実践教育体制をみごとに確立している。

難しい手法の解析支援・攻め方のアドバイス・事例の紹介・手法の教育などに年間600件前後の相談があり、求めに応じた実践教育が登録テーマの解決に大きく貢献している。

#### 2) SQC研究会の拡充

当初は、SQCに魅力を感じている人が少なかった。そこで、SQCのファンを増やすため、次の①～④のような場作りを図り活発に活動している。

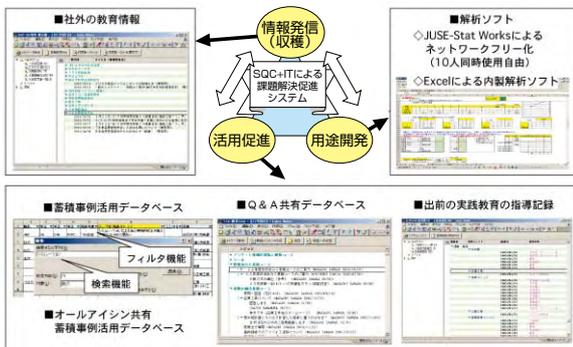
- ①技術開発SQC研究会 ②生産技術品質工学研究会  
③事務管理SQC研究会 ④オールアイシンSQC研究会

#### 3) IT活用SQC情報ネットワークの整備

SQCについて知りたい情報や聞きたい情報をタイムリーに提供出来るSQC情報サービス体制を、次の①～④のようなデータベースを整備して、誰もが随時検索出来る仕組みを完成した。

- ①蓄積事例活用データベース ②Q&A共有データベース  
③出前の実践教育の指導記録 ④社内外のSQC教育情報

#### IT活用SQC情報ネットワークの概要



このように、SQC手法の活用推進を組織的に推進してきた結果、すべての部門で重要な問題解決に、SQC手法が日常業務の中で自然な形で使われるようになっている。

### 4. JUSE-StatWorksを全社標準パッケージとしてフル活用

1999年当時、どの統計解析パッケージを標準にしようかと選択途次にあつて、数種類のパッケージを各1式導入していた。

マーケティング関係の大量データを扱う難しいテーマを各社のパッケージで解析してみたが、いずれも上手に解けない。「唯一、JUSE-StatWorksだけが解決出来た」。これをキッカケにして、すっかりJUSE-StatWorksファンになったとのこと。

機が熟して、2003年、本社部門にJUSE-StatWorksのネットワーク版(クライアントフリー型)を導入して、一気に活用が広がった。本社部門の全員が自席で自由にJUSE-StatWorksを使用可能となったため、問題解決のスピードが格段に向上し、業務改革に寄与している。

2004年8月からは、11工場でも使用可能となり、さらにグレードアップした。このため問題解決のスピードアップは、全社的に広まりつつある。

活用が進むに従って品質保証・技術研究所・生産技術部門だけでなく、営業部門からも素晴らしい事例が報告されている。活用の底辺が広がって、業務改革のスピードアップが加速化している。

### 5. 今後の展望

経営活動全般にわたってSQC手法が日常の業務の中で自然な形で活用されるようになってきたため、顕在不良の再発防止という点からは大きく脱皮しつつある。

そのため今後は、「不良発生の未然防止」→「不良の出ないロバストな技術の創造」という課題に重点が移行しつつある。

JUSE-StatWorksも、このような新しい時代の要請に応えられるように、FMEA、QFD、タグチメソッドおよび応答曲面法などの充実が期待がかけられている。(敬称略)

(本稿は、アイシン精機(株) TQM・PM推進室 室長伊藤要蔵氏、主査 花村和男氏、およびチームリーダー澤田昌志氏からお話をお聞きし、日科技研が取り纏めたものです)

掲載されている著作物の著作権については，制作した当事者に帰属します。

著作者の許可なく営利・非営利・イントラネットを問わず，本著作物の複製・転用・販売等を禁止します。

所属および役職等は，公開当時のものです。

■公開資料ページ

弊社ウェブページで各種資料をご覧ください <http://www.i-juse.co.jp/statistics/jirei/>

■お問い合わせ先

(株)日科技研 数理事業部 パッケージサポート係 <http://www.i-juse.co.jp/statistics/support/contact.html>